

# 母子相互作用の臨床的・心理・行動科学的 ならびに社会小児科学的意義に関する研究班

## 総 括 研 究 報 告

班長 小 林 登（東京大学医学部小児科）

わが国の工業化および先進化、さらに生活圏の都市化に伴って、一般生活は豊かになるとともに、小児の生活条件は急速に変化し、その結果、小児の発育さらに育児について、小児科学、育児学、保育学、さらに教育学の実践的な分野で多くの問題がみられている。すなわち、小児科学の診療の場では、親子関係の失調、虐待児問題、心身障害など、保育の場では、育児障害、さらに委託育児など、教育の場では登校拒否、暴力などが現在、社会的問題となっているのは周知の通りである。

本研究班は、母子相互作用、mother infant interaction、ならに親子関係を中心として、妊娠、分娩、出生の時点より乳児幼児の育児保育のあり方を産科学的、小児科学的、発達、心理学的さらに教育学的に研究し、あわせてその社会的意義を調査分析することを目的としている。

班員は全国の関係分野の専門家から選び、小児科学者 18 名、産科学者 2 名、心理・教育・保育学者 7 名、その他 3 名、計 30 名をもって編成した。さらにこの問題に関心のある学識経験者 5 名を評価委員に依頼した。

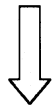
とりあげられた研究プロジェクトは次のように整理することができる。

1. 母子相互作用の行動科学的小および情報科学的分析
2. 胎児・新生児・乳児の行動発達
3. 乳児の愛着（attachment）形成のメカニズムの分析
4. 母性確立のメカニズムの分析
5. 母親の育児行動ならびに育児意識の分析
6. 母親の育児における意義
7. 心身障害児の親子関係の分析
8. 分娩形式ならびに新生児の養育方式と母性意識の関係
9. サルなどの動物による育児の実験的研究
10. 日本各地における育児の実態調査

本年度は研究開始後の第 1 年度であり、各分担研究者は過去の研究実績にもとづいて、研究を企画、立案し、研究を開始した。その研究上の問題点さらに研究成果は 2 回の班会議において活発に討議された。

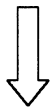
研究協力者さらに評価委員の全員は、本研究は学問的な面のみならず、社会的な面でも極めて重要な意義を有するものである点で一致した。基礎的な面では、母子関係の成立のメカニズム、すなわち、児の母親に対する愛着、さらに母親の児に対する母性の形成は、生物学的、あるいは生得的（遺伝的）な因子が大きいと考えられる知見が得られたが、それが環境的（文化的）な因子がどの程度関与するか大きな問題が残されている。社会的な面では、母子関係、親子関係がうまくいくような環境をいかに形成するか、委託育児の水準をいかにあげるかなどの具体的な問題が残されている。

第 2 年度は、本年度の成果をふまえて、研究班を再編成し、本研究班の所期の目的を果すよう努力する。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



わが国の工業化および先進化,さらに生活圏の都市化に伴って,一般生活は豊かになるとともに,.小児の生活条件は急速に変化し,その結果、小児の発育さらに育児について,小児科学,育児学,保育学,さらに教育学の実践的な分野で多くの問題がみられている。すなわち,小児科学の診療の場では,親子関係の失調,虐待児問題,心身障害など,保育の場では,育児障害,さらに委託育児など,教育の場では登校拒否,暴力などが現在,社会的問題となっているのは周知の通りである。